

没理想論争注釈稿（五）

| | |
|----------|---|
| 著者 | 坂井 健 |
| 雑誌名 | 文藝言語研究．文藝篇 |
| 巻 | 25 |
| ページ | 90(13)-102(1) |
| 発行年 | 1994-03-25 |
| その他のタイトル | A Note on the Disputation about ‘ Invisible Idea ’ (5) |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/13752 |

没理想論争注釈稿（五）

坂井 健

エミル、ゾラが没理想^①

今の欧羅巴の美術は大抵没理想派の賜なり。没理想派の賜をばわれ受けて、没理想派の論をばわれ斥く^②。されば壁を留めて櫃を還す^③を我山房の謀とするなり。

（1）「エミル、ゾラが没理想」・『しがらみ草紙』二八号（明治二五年一月二五日）に「山房論文其九」として掲載、のち『月草』収録。のち鷗外が「吾人比量の見を以て逍遙子が非想論即没却理想論をみるときは、是れ現実主義のみ、自然主義のみ。図らざりき、逍遙子は覆面したるゾラならむとは。」（「逍遙子と鳥有先生と」明治二五年三月）として、逍遙をゾラに見立てて行く伏線になっており、この論も没理想論争の文脈の中で捉えなければならぬ。だが、岩波全集の「柵草紙の山房論文」（鷗外による『月草』の編集に従い、没理想論争関係の論文のみを集めたもの）の中で、他の論が発表順に収録されているのに対して、この論だけが末尾にまわされているという扱い方が端的に示しているように、他の没理想論争関係の鷗外の論とは性格が異なっている。一口にいて、他の論が直接逍遙を論難しているのに比べ、この論では、撫象子（巖本善治）と対比しつつ、逍遙をゾラに見立てるにとどまって

(2)

おり、直接逍遙の論を攻撃したものではない。逍遙に対しての応酬というよりは、鷗外の感想といった性格である。なお、「エミル、ゾラが没理想」の発表は、一月二五日、「烏有先生に謝す」(『早稲田文学』七号)は一月一五日、「没理想の語義を弁す」(『早稲田文学』八号)は一月三一日であるから、「没理想の語義を弁す」以前のものであるが、内容的にみて、「没理想の語義を弁す」執筆時に逍遙が「エミル、ゾラが没理想」を意識していたとは思われないこと、「逍遙子が白日夢」(『早稲田文学』九号、二月一五日)には、さっそく「エミル、ゾラが没理想」に対する反応らしきものが見られることから、「エミル、ゾラが没理想」を「没理想の語義を弁す」の後に扱うことにしたが、一方、鷗外の側からすれば、明治二五年一月二三日付落合東郭宛書簡には「柵二十八はやく出来候に付直に差上申候」とあり、執筆時期は「エミル、ゾラの没理想」の方が先のである。発表順に扱うべきだったかもしれない。

没理想派の賜をばわれ受けて、没理想派の論をばわれ斥く・欧州の「没理想派」、即ち、エミル、ゾラの影響を受けた「今の欧羅巴の美術」を評価すると共に、その論を斥けようとするもの。具体的には、主に小説論と絵画論との矛盾をつくという方法を取る。なお、「附記、其言を取らず」(『しがらみ草紙』二七号)の「われは早稲田文学と共に戯曲を嗜み、早稲田文学と共に叙事中に評を挿まざる小説を愛し、早稲田文学と共に造化に似たる詩を好み、早稲田文学と共に悟りを貴む。然れどもわれは早稲田文学と共に没理想を説かず。」を念頭に置いていると考えられる。なお、「小説論」(Cfr. Rudolf von Gottschall Studien) (明治二二年一月)の時点では、鷗外自身が注記するように鷗外のゾラに関する知識はゴットシャルによっていた。(神田孝夫「鷗外初期の文芸評論」『比較文学研究』第四卷、一、二号)

(3)

壁を留めて櫃を選す・「櫃を買ひ珠を選す」は、「韓非子・外儲説」の故事に基づく。楚の人が箱に寶石を入れて鄭の人に売ったところ、箱があまりにすばらしいので、箱だけ買って、寶石を還したというエピソードの後に、「今世之談也、皆道弁古文辭之言。人主覽其文而忘有用。」というコメントがついている。外面や形式にだけ左右されて肝心の内容を見落とすことのとえ。特に議論について、表現技法にとらわれて、肝心の内容を見落としてはいけない、との戒めとして使われるようだ。この故事を「壁を留めて櫃を選す」とひっくり返すことで、内容、つまり、「没理想」的な文学作品には賛成だが、外形、つまり、「没理想」という言葉には与しない、という意味。

實際主義^①といひ、極実主義^②といひ、自然主義といふ、その言葉はおなじからずといへども、孰か没理想ならざる。美術を評し、文学を論ずるに當りて、没理想を基とするものハ、独逸に文庫 Magazin の一党あり、スカンデナ维亚にイブセンが余流あり、英吉利にも俄羅斯にもその人あれど、概皆エミル、ゾラを宗とす^③。

(1) 實際主義・ゾラの評論集「エドワルド・マネ」(一八六七年)の「Le *actua*list」の小見出しがある。

(2) 極実主義・『ドイツ文学辞典』(日本独文学会、河出書房、昭和十一年)に「彼ら(アルノー・ホルツとヨハネス・シュラーフ)の主張する徹底自然主義(Der konsequente Naturalismus)なるもの」は、ホルツの「芸術、その本質とその法則」(一八九〇〜九二年)、「抒情詩の革命」(一八八九年)などの所説にしたがえば、「芸術作品は稟性を通して見られた自然の一角である」というゾラの言葉から「稟性」(Temperament)の語を除去して、直ちに「芸術は自然へ復歸する傾向を持つ」(Die Kunst hat die Tendenz, wieder Natur zu sein)というのであるが、「その時の再生条件と、その取扱ひ方とに依じて」と付言されている。ここにゾラの実験小説的方法の摘要が暗示される。すなわち、主觀を排斥し、科学的・機械的方法によつて自然のコピーを作り出そうとするので、その様式は「秒刻体と称せられる。いわば色と光と線と運動との分析描写である。」とある。

(3) 独逸に文庫 Magazin の一党あり・不詳。『ドイツ文学辞典』には、「かかる主張(小説に於けるロマン的要素の除去、現実の人間の描写、作者による登場人物への共感・批判の撤廃を打ち出したゾラの主張)に呼応してドイツでも自然主義の理論づけが行われた。その主な機関誌は「批判闘争」(Kritische Waffenzuge (Gesellschaft) およびパリのテアートル・リールに倣つて組織された「自由劇場」の同名の機関誌などで、なかでも「社会」が最も有力で、同誌が創刊された一八五五年にはミュンヘン派の「文学革命」とベルリン派の新詩集「現代詩人」が現われた。」とある。

(4) 美術を評し、文学を論ずるに当たりて、没理想を基とするものは、独逸に文庫 Magazin の一党あり、スカンデナ维亚にイブセンが余流あり、英吉利にも俄羅斯にもその人あれど、概皆エミル、ゾラを宗とす・(ゾラの主導した自然主義は)ドイツにハウプトマン、ズーダーマン、ホルツ、シュラーフ、北欧ではイブセン、ストリンドベルイ、イギリス(ハーディ、ジョージ・ムア)・アメリカにもその影響は及んだ、厳密にいえば問題を残すがロシアのツルゲーネフ、トルストイ、ドフトエフスキー、チェーホフにも影響を及ぼし、詩における象徴主義と並んで一九

世紀末の全欧的な文芸思潮の一つとなった。」(『比較文学辞典』松田穂編、東京堂出版、昭和五三年)

わが見るところを以ていへば、ゾラが小説に就いての没理想論は試験小説 *Le Roman expérimental* と題したる数篇の「エッセイ」⁽¹⁾ にあり。その劇に就いての没理想論は劇部にての自然派 *Le naturalisme au théâtre* (*Annales du théâtre*, 1879) と題したる文にあり。またその画に就いての没理想主義はマネエが油絵を評したる文 (*L'Événement*, 1866) にあり。ゾラが立言は一系をなしたる哲学にもあらず、また首尾完き審美論にもあらず、そのあらましを左に記せむ。

(1) 試験小説 *Le roman expérimental* と題したる数篇の「エッセイ」・一八八〇年の評論集『実験小説論』*Le roman expérimental* を指す。Le roman expérimental, Lettre à la jeunesse, Le naturalisme au théâtre, L'argent dans la littérature, Du roman, De la critique, Le républicain et la littérature の七編の論文集が収められており、各論文集はさらに何編かに分かれてゐる。有名な『実験小説論』は一八七九年に『Le Messager d'Europe』、『Le voltair』に掲載されたものであるが、この評論集はその論文の名を冠し、他の論文をも収録したものである。(以下、ゾラの作品についての書誌は、すべて『Emil Zola 'Œuvres complètes' Édition établie sous la direction de Henri Mitterland' Paris, Cercle du Livre Précieux, 1968) にあらず。また、作品の引用も特に断らない限りは、本全集による。)

(2) 劇部にての自然派 *Le naturalisme au théâtre* (*Annales du théâtre*, 1879) と題した論文・評論集『実験小説論』所載の *Le naturalisme au théâtre* を指す。同名の評論集 (*Le naturalisme au théâtre*) が一八八〇年に出版されているが、一八七九年という年代指定からみて、これではない。Annales du théâtre は、正しくは、Les Annales du théâtre et musique。一八七八年の演劇・音楽年鑑。発行は、一八七九年。Le naturalisme au théâtre は、評論集『実験小説序説』発行に当たって再録された。

(3) マネエが油絵を評したる文『L'Événement, 1866』・一八六六年、ゾラは、エヴェヌマン紙に再三にわたってマネエ一派擁護の論文を掲載した。これは、主に宮廷や貴族などと結び付き、歴史画などの主題画に固執し、現代的作風のマ

ネ一派を官展で落選させた既成画壇に対する攻撃であつた。(尾崎和郎『若きジャーナリスト エミル・ゾラ』誠文堂出版、一九八二年)

ゾラはその主義を説いてはいはく。我主義は新しき自然学を文と術とに應用する符号なり。⁽¹⁾「クラツシツク」の符号ハ行はるゝこと二世紀なりき。「ロマンチツク」の符号はこれに繼いで起りしかど、其運命は一世紀の四分の一にだに至らず。⁽²⁾我主義は実に「ロマンチツク」を前驅にして出でたるものなり。我主義は系統にあらずまた党派にあらず。奉ずるところは唯眞のみ。眞は実なり、造化なり。美は眞の一面に過ぎずと。⁽³⁾

(1) 我主義は新しき自然学を文と術とに應用する符号なり・以下は、評論集『実験小説論』所載の「Le naturalisme au théâtre」(I・Vに分かれる)のうちIの一部の抜粹・要約に相当する。Iは緒論に当たり、自然主義が十九世紀の全体の時代風潮であることを説き起している。この部分に直接該当する箇所は見えないが、Le naturalism, dans les lettres, c'est également le retour a la nature et a l'homme, l'observation directe, l'anatomie exacte, l'acceptation et la peinture de ce qui est. (文学においても自然主義は(科学におけるのと)同じように、自然と人間への回帰であり、直接の観察であり、正確な解剖であり、あるがままを受け入れ描写することである。)などである。訳文の文責筆者。以下、特に断らない限り、同様。

(2) 「クラツシツク」の符号ハ行はるゝこと二世紀なりき。「ロマンチツク」の符号はこれに繼いで起りしかど、其運命は一世紀の四分の一にだに至らず・Le naturalisme au théâtre」に「Le formule classique a dure deux siècles au moins ; pourquoi la formule romantique, qui l'a remplacée, n'aurait-elle pas une durée égale? Et l'on éprouve une surprise, lorsqu'on s'aperçoit, au bout d'un quart de siècle, que le romantisme agonise, mourant lentement de sa belle mort. Alors, la verité se fait sa jour. Le mouvement romantique n'était décidément qu'une échauffourée. (古典主義的表現様式は少なくとも二世紀は継続した。なぜ、それに代わったロマン主義的表現様式は同じ期間継続し得ないのだろうか。そして、僅か四分の一世紀に、ロマン主義がゆつくりとその美しい最後を迎えて、滅びようとしていることに気付くときに驚くのだ。今や事実が明らかになった。ロマンチズムの運動は確かに小競り合いに過ぎなかつたのだ。」とあり、十九世紀に自然主義が起こったことが続いて

説かれる。

(3) 我主義は系統にあらずまた党派にあらず。奉ずるところは唯眞のみ。眞は実なり、造化なり。美は眞の一面に過ぎずと・未詳。ソラが「眞」を重視したことは確かだが、「眞は実なり、造化なり、美は眞の一面に過ぎず」というような形而上的論議は・「Le naturalism au théâtre」に見出せない。なお、「美は眞の一面」は「月草」では「美は実の一面」。この改変は、『月草』の時点、鷗外が眞と美とを別の範疇のものとして峻別するようになったことを示すだろう。

されば小説に「ロマン」の名をあたふるはソラが好むところにあらず。「ロマン」といふ字には、つくり物語といふに近き義ありて、作者の空想に待つことあればなり。おほよそ自然学の方便には觀察と試験とあり。觀察のみにて看到らむとするには試験ある耳。小説は公衆の前に行ふ試験の記事なり。小説は分析的批評なり。「ロマン」の字に代ふるに「エチユウド」の字を以てせば頗妥ならむ。さて試験の結果は事実なり。事実に向ひて其利害を問ふべからざることを、化学の上にて窒素の人を傷ふことあるを怒るに由なきが如くなるべし。これをソラが小説論とす。

(1) 「ロマン」といふ字には、つくり物語といふに近き義ありて、作者の空想に待つことあればなり。おほよそ自然学の方便には觀察と試験とあり。觀察のみにて看到らむとするには試験ある耳。小説は公衆の前に行ふ試験の記事なり。小説は分析的批評なり。「ロマン」の字に代ふるに「エチユウド」の字を以てせば頗妥ならむ・評論集『実験小説論』所載の「Du roman」に「Toutes ces erreurs viennent de l'idée fausse qu'on continue à se faire du roman. Il est fâcheux d'abord que nous n'ayons pu changer ce mot <roman>, qui ne signifie plus rien, appliqué à nos oeuvres naturalistes. Ce mot entraîne une idée de conte, d'affabulation, de fantaisie, qui jure singulièrement avec les procédés verbaux que nous dressons. Il y a quinze à vingt ans déjà, on avait senti l'impropriété croissante du terme, et il fut un moment où l'on tenta de mettre sur les couvertures les mot <étude>». (チヅツ)の間違ひは人が小説について持ち続けている不正確な考えから来ている。

qui peut être beaucoup plus exact et saisissante que la description faite dans un roman? (けれども、描写は演劇に持ち込まれる必要はない。というのは、当然のことながら、それは存在するからだ。装飾は連続した描写であつて、それは小説で行われる描写よりも、ずっと正確で深い感動を与えるものではなかるうか。)とある。

ゾラは画を以て術となすを嫌ふ。故奈何といふに、術といふ語には極致を求むるが如き義を含みたればなり。⁽¹⁾画は宜しく造化を写すべし。造化にあらず、真にあらずして、夢の如く、幼物語の如きものを写すものをば、画工となすに足らざるべし、然はあれど實際派なりとて、たゞの光写図のやうなる画を作り、いたづらに事実を模倣するは悪し。⁽²⁾画工にはおのゝ其特異なる眼あり、其の特異なる性 (tempérament) ありて、これに慥ひたる新しきものを製作するを其本分とす。⁽³⁾要するに画には個人的と実在的とあるべし。個人的なるものは人より来り、実在的なるものは造化より来る。造化は常住にして平等なれども、人は不常住にして変化極なし。⁽⁴⁾美術品は個人の性の地より觀たる造化の一截なり。これをゾラが画論とす。

(1) ソラは画を以て術となすを嫌ふ。故奈何といふに、術といふ語には極致を求むるが如き義を含みたればなり・“Mon salon” 所載の “Le moment artistique” に Le mot <art> me déplaît; il contient en lui je ne sais quelques idées d’arrangements nécessaires, d’idéal absolu. (芸術、という言葉は、私には氣に入らない。というのは、必要な取り決めについてのいくつかの考えは知らないけれども、この言葉はそれ自身に觀念的な絶対を含むからである。)とある。

(2) 画は宜しく造化を写すべし。造化にあらず、真にあらずして、夢の如く、幼物語の如きものを写すものをば、画工となすに足らざるべし・“Mon salon” 所載の “Les réalistes du salon” に “Peindre des rêves est un jeu d’enfant et de femme; les hommes ont charge de peindre des réalités.” (夢を描くのは子供と女の遊びだ。大の男は現実を描く義務がある。)とある。なお、「画工となすに足らざるべし」は『月草』では「画工となすに足らず」。

(3) 然はあれど實際派なりとて、たゞの光写図のやうなる画を作り、いたづらに事実を模倣するは悪し・(5) 参照。

(4) 画工にはおのゝ其特異なる眼あり、其の特異なる性 (tempérament) ありて、これにひたる新しきものを製作

するを其本分とす・Le moment artistique¹は、 Faire d'art, n'est pas faire quelque chose qui est en dehors de l'homme et de la nature? Je veux qu'on fasse de la vie, moi ; je veux qu'on soit vivant, qu'on crée à nouveau, en dehors de tout, selon ses propres yeux et son propre tempérament. (芸術を作る²というは、人間と自然とのほかに存在するなにかを作る³ことではないのか。私は人が人生が作ることを望む。つまり、人が生き生きとすることを望み、人がすべてのものの他に、固有の眼力と固有の氣質にしたがって新たに創造することを望む。)とある。

(c) 要するに画には個人的と実在的とあるべし。個人的なるものは人より来り、実在的なるものは造化より来る。造化は常住にして平等なれども、人は不常住にして変化極なり・Le moment artistique¹は、Il y a selon moi, deux éléments dans une œuvre : l'élément réel, qui est la nature, et élément individuel, qui est l'homme. /Le élément réel, la nature, est fixé, toujours le même ; il demeure égal pour tout le monde ; je dirais qu'il peut servir de commune mesure toutes les œuvres produites, si j'admettais qu'il puisse y avoir une commune mesure. L'élément individuel, au contraire, l'homme, est variable à l'infini ; autant d'œuvres et autant despris différents ; si le tempérament n'existait pas, tous de tableaux devraient être forcément de simples photographies. (私の考えでは、作品には二つの要素がある。一つは、自然という現実的な要素であり、もう一つは、人間という個人的な要素である。現実的な要素、つまり自然は固定しており、いつも同一である。この要素はすべての人にとっていつも同じままである。だから、共通の物差しがあると仮定するならば、製作されたすべての作品に対する共通の物差しとして役に立つといえる。人間のものとしての個人的な要素は、これと反対に、転変窮まりない。作品の数だけ、異なった精神がある。もし氣質というものが存在しなかったら、あらゆる絵画は必然的に単なる写真になってしまうはずだ。)とある。

夫れ新しき自然学を美術に応用するは固より善し。然れどもゾラが言の如く、美に代ふるに真を以てし、¹ 術に代ふるに批評と試験とを以てするときは、矛盾の迹つひに掩ふべからざるに至らむ。ゾラが「エツセイ」の一(De la morale²)を見るに、新聞記者の醜き刑事を録して厭はず、却りて小説家の筆美ならざるを責むるを笑へり。こは小説家に対する審美の感と刑事に対する記実の感とを分たずして、遂に小説を見ること刑事を見るが如くな

るに至りしなり。さるにゾラは画を論ずるに至りて、忽ち造化以外に個人といふものを添へ出し、光写図に等しき画を取らずといふ。若し新聞に出でたる刑事の記録と、詩人の作りたる小説とを測るに、おなじ定規を以てすべくんば、光写図の妙は絵画の妙に同じからむ。ゾラは画に於ては取捨の別を立てながら、文に於ては去就の分を明にせざりき。

(1) に代ふるに真を以てし・『月草』では「美に代ふるに実を以てし」。改変の理由については前述。

(2) ゾラが「エッセイ」の「(De la morale)」・評論集『実験小説論』所載の論文集「Du roman」の中の論文の一つ。

(3) 新聞記者の醜き記事を録して厭はず、却りて小説家の筆美ならざるを責むるを笑へり・De la moraleの中でゾラは、三面記事に残酷な事件を詳しく掲載している編集者が、実験小説を非難していることに反発し、実験小説の正当性を主張している。

(4) 忽ち造化以外に個人といふものを添へ出し・『月草』削除。

(5) 若し新聞に出でたる刑事の記録と、詩人の作りたる小説とを測るに、おなじ定規を以てすべくんば、光写図の妙は絵画の妙に同じからむ・鷗外の文脈では、ゾラの主張する小説は、新聞記事と同等に事実を写したものに過ぎないということになっているので、ここでいう「同じ定規」とは、いかに実物に近いかということ。したがって、絵画もいかに実物に近いかということが評価の基準になる訳で、そういうことになると、写真も絵画と変わらなくなる。ゾラは画に於いては取捨の別を立てながら、文に於いては去就の文を明にせざりき・絵画では、temperamentの重要性を指摘し、作家の主体性を強調しておきながら小説においては、事実に近いことのみを求めて、作家の主体の重要性を明らかにしなかった、という鷗外の解釈。

蓋しゾラがいはゆる不常住にして変化極なき個人的は、即ち是理想なり。ゾラは天のなせる詩人なれば、おのれは空想を遠離けて批評をなし、試験をなすとおもひつゝも、神来に逢ひ、空想を役したり。ゾラは没理想論を唱えつゝも大理想家の業をなしたり。彼が小説に於て造り物語を取らず劇に於いて舞台に上して活動すべからざるものを取らず、又画に於いて夢の如く、幼物語の如きものを写したるものを取らざるは、即是れ類想を斥くる

なり。⁽³⁾ 彼が文と術とに⁽¹⁾応用し得たるものは造化に以て造化にあらず。その事実とも見え、試験の結果とも見え、將た真ともおもはれしは即是個想なり。⁽⁵⁾ 彼が美術品を以て個人の性の地より観たる造化の一截となすは、即是れ小天地の図に對して大天地の影を望む境界なり。⁽⁶⁾ 要するにゾラが没理想論は造化以外に個人を添へ出したるために有理想論になりしが如し。

(1) ゾラがいゆる不常住にして変化極なき個人的は、即ち是理想なり・『月草』削除。

(2) ゾラは天のなせる詩人なれば、おのれは空想を遠離けて批評をなし、試験をなすとおもひつゝ、も、神来に逢ひ、空想を役したり。ゾラは没理想論を唱えつゝ、も大理想家の業をなしたり・河内清氏は、ここに鵠外のゾラ評価の変化を見る。「ここに三年前のかの『小説論』と比べてみれば、この間における彼のゾラについての理解の変化に気づかれよう。彼の反ゾラの立場はその資性にふかく根ざすものでかわらなかつたにはちがいないが、ゾラ文学を単に『化学所の日記』だとか『解剖局の週報』だとか片づけていらなくなつたことは明かだ。『ゾラと日本自然主義文学』一九九〇、梓出版社）ただし、「逍遙子と鳥有先生と」（二五年三月）では「逍遙子が非想論即没理想論をみるときは、是れ現実主義のみ、自然主義のみ。図らざりき、逍遙子は覆面したるゾラならむとは。」と評価が後退しており、ゾラに対する評価に揺れがみられる。もつとも、「エミル、ゾラが没理想」においても、ゾラの小説論に限つていえば、現実主義と決めつけているわけで、これを踏襲していると考えらるなら、必ずしも矛盾する訳ではない。

(3) 彼が小説に於いて造り物語を取らず、劇に於いて舞台上にして活動すべからざるものを取らず、又画に於いて夢の如く、幼物語の如きものを写したるものを取らざるは、即是類想を斥くるなり。歴史画などの主題画を否定し、作家の主体性の現われた作品を期待したゾラの論を、類型的作品を否定したハルトマンの説に当てはめて考えたもの。「類は多形なりといへども。その数に限りあり。故に芸術にして類を以て基本とする時は、典型に陥り、師弟相承して、模倣の弊を長ず。」（『審美綱領』）

(4) 文と術・文学と美術。特に小説と絵画。

(5) 彼が文と術とに⁽¹⁾応用し得たるものは造化に以て造化にあらず。その事実とも見え、試験の結果とも見え、將た真ともおもはれしは即是個想なり・逍遙がシェークスピアの作品を「没理想」であるが故に「造化」そのままの姿であ

るとしたのに倣つて、ゾラの作品を「個想」が現われているが故に「造化」そのままである、としたもの。逍遙のいう「没理想」の作品は、無理想ではなく、「個想」という有理想のものであると規定しようとする文脈にある。彼が美術品を以て個人の性の地より見たる造化の一片となすは、即是小天地の図に対して大天地の影を望む境界なり・これもゾラの文学論をハルトマンのいう「個物の能く一天地をなして大千世界と相呼応する」(「逍遙子の新作十二番中既発四番合評、梅歌詞集及粹神子」)「小天地想」に当てはめて考えたもの。

近頃我国にて造化を以て美術を説かむと試みし人は、前に撫象子あり。後に逍遙子あり。撫象子が自然主義は没理想に非ずして有理想なり。その極致は古の希臘人に似て善と美とを併せたるものなり。さればおなじく自然といひ、造化といへど、ゾラが自然は弱肉強食の自然なるに、撫象子が造化は蝶舞ひ鳥歌ふ造化なり。逍遙が自然主義は則ちこれに反す。その没理想の造化は酷だゾラが造化に肖たり。されば逍遙子とゾラとは共に客観を掲げて主観を抑へ、叙事の間に評を挿むことを嫌ひたり。逍遙子戯曲の文を以て読者の思倣し次第にていかやうにも見ゆるものとなしてこれを尊めば、ゾラは小説の文を以て利害を問ふべからざる事実となしてこれを庇ふ。これ等の処を細に比べ論ぜば、いとおもしろしかるべけれど、また折もあらむとおもひて止みぬ。

(1) 近頃我国にて造化を以て美術を説かむと試みし人は、前に撫象子あり・撫象子は嚴本善治。「国民之友」第四八号「文学と自然」(『女学雑誌』一五九号、明治三二年四月二七日、署名は「しのぶ」)を著して、「最大なる文学は、自然の俤に自然をうつし得たるものなり。極美の美術は決して不徳を伴ふことを得ず。」と主張し、これに対して鷗外は「『文学と自然』を読む」(『国民之友』五〇号、明治三二年五月一日)、「再び自然を崇拜する人にいふ」(『国民之友』五二号、明治三二年六月一日)で、物理的存在に過ぎぬ自然は、そのままでは美術たりえず、美と善が必ずしも一致しないことを説いて反論した。ここでは特に、文学が自然(造化)のままでなければならぬ、という嚴本の主張を念頭においている。

(2) 撫象子が自然主義は没理想に非ずして有理想なり。その極致は古の希臘人に似て善と美とを併せたるものなり・嚴本は、たとえば「神韻は之自然の最も美なる粹にあらずや。」(前掲『女学雑誌』)と述べている。このような自然

(3)

の中に「美」が含まれているという考えを「有理想」とし、前述のように「極美の美術は決して不徳を伴ふことを得ず。」という考えから「善と美とを併せた」としたもの。

逍遙子が自然主義は則ちこれに反す。その没理想の造化は酷だソラが造化に肖たり。……ソラは小説の文を以て利害を問ふべからざる事実となしてこれを底ふ・前述したように、「逍遙子が非想論即没却理想論をみるときは、是れ現実主義のみ、自然主義のみ。図らざりき、逍遙子は覆面したるソラならむとは。」（「逍遙子と鳥有先生と」二五年三月）と逍遙をソラに見立てて行く伏線であるが、河内清氏は「逍遙の没理想論に自然主義の客観主義をみ、ゾライスムをみた鷗外は、さすがに当時第一の西欧文字通だった。」（前掲書）と述べて鷗外の慧眼を評価している。